

*Cedric Boeckx: Elementary Syntactic Structures:
Prospects of a Feature-Free Syntax*

Cambridge Cambridge University Press, 2015,
xviii + 202pp.

吉田江依子

1. はじめに

1950年代半ばに始まった生成文法は、当初から言語は生得的に獲得されるものであり、言語機能は生体の一器官であると考えられてきた。言語機能が生体の一器官であるならば、他の生体の器官と同様その起源を探ることができるはずであり、また言語能力の進化が生物進化の一例である以上、それは生物進化の理論と整合性を持つものでなくてはならない。ところが、従来の生成文法における言語理論は言語領域に固有と思われる部分が大きく、生物進化との整合性を持たせる説明を困難にしていた。近年、Hauser, Chomsky, and Fitch (2002) を代表とする議論を中心に、ヒトの言語をより生物学的な観点からとらえ、進化の観点に準じた言語理論を構築しようとする研究が増えてきている。本書は、このような流れの中、生物言語学 (biolinguistics) の観点からミニマリスト・プログラムの言語理論そのものの見直しを図った研究書である。

本書の著者である Cedric Boeckx はミニマリスト・プログラムの立場からこれまで多くの著書・論文を発表してきているが、特に近年は進化言語学に関する著書を精力的に出しており、現在のこの分野における第一人者の一人であることは間違いない。本書は、著者がそれまでに発表してきた論文の内容に基づき、語彙部門、統語部門、意味部門、音韻部門、言語習得、言語変異などを総合的に網羅する形で構成されており、著者のこの問題に対する考え方の全体像が分かるものである。

なお、本書は、進化を念頭にいった生物言語学の目指す方向性が示されてお

り、その分野に対する多少の知識を持っているに越したことはないが、基本的には生成文法、特にミニマリスト・プログラムに関する議論がもとになっているので、必ずしも精通している必要はない。以下、提案の骨子を中心に各章の内容を概観し、本書の持つ意義を述べることにする。

2. 概要

本書は、5つの章（1. Biolinguistic concerns; 2. Syntactic order for free: Merge α ; 3. Trusting in the external systems: descent with modification; 4. Elaborate grammatical structures: how (and where) to deal with variation; 5. Interdisciplinary prospects）に3つのAppendixを加えた構成となっている。

第1章では、生物言語学の立場からみた現在の極小主義理論の問題点を中心に論じている。ミニマリスト・プログラムについて従来批判されてきたことは、統語部門を単純化し、そこで扱えないものは全て外的システムに転化しているというものであった。しかし著者が考える最も大きな問題点は、説明すべきことを全て語彙の持つ特徴—具体的には語彙の持つ素性—に起因させてしまっていることであると指摘している。著者はこのような考え方を語彙中心主義（lexicocentrism）と呼んでおり、これが現在の統語理論における最大の問題点であると指摘している。レキシコンに恣意的に課した素性（cf. EPP素性、解釈素性など）によって言語の様々な特性を説明する限り、説明的妥当性以上（beyond explanatory adequacy）の妥当性—生物学的基盤に基づく言語理論の構築—を達成することはできないとしている。著者は、統語部門において処理される基本の単位が、素性の束（bundles of features）であることも問題があると論じている。こういった語彙中心主義の考え方の問題点を指摘した上で、第2章で代案を示している。

第2章で、著者は、語彙部門を狭義の語彙部門（narrow lexicon）とし、語彙項目には、併合（Merge）を誘引する周縁素性（edge feature）のみを持つと仮定した。語彙項目には、解釈と音韻に関するインデックス（index）を持つが、これらはスペルアウト時に挿入されるものであって、統語部門において存在す

るのは周縁素性のみであり、1章で指摘された素性の束を構成していない。また、操作は(1)で示した素併合 (bare merge) と呼ぶ、対称的な集合形成の手順しかもたない。

- (1) Take two lexical items a and β and form the set $\{a, \beta\}$: $M(a, \beta) = \{a, \beta\}$ (p. 27)

このように本書で提案する統語部門は、タイトルともなっている、素性を極力排除した簡潔なもの (elementary syntactic structures / feature-free syntax) を仮定している。

本章では、このような語彙項目や操作を前提とした上で、範疇をどう扱うか、フェイズについてはどう扱うか、非対称的現象をどう扱うかなど、これまでの統語部門で扱われてきた様々な事象について論じられている。

第3章のタイトルにある“descent with modification” (変化を伴う由来) は、進化の過程について一般的に用いられる用語で、進化は突然変異によって起こるものではなく、すでに存在している前駆体 (precursor) から多様化して起こるという考え方であり、著者は、本章において統語部門の出現についてこの観点から説明を与えている。元来、音と意味は統語部門が介在して結び付けられていると考えられているが、一方で、音と意味が直接結び付いているという主張もある (cf. late insertion)。音と意味が直接繋がっているという事例は、ベルベットモンキーの鳴き声など、他の種において見られる現象であり、著者は、ヒトの言語における統語部門の出現は新しいインターフェイスの出現ではなく、音と意味が接触するインターフェイスの形を変えたもの、つまり「変化を伴う由来」によるものであるとして、統語部門の出現についても進化的に説明ができるとしている (3.1 節)。本章では、先行研究をもとに、ヒト以外の種も持つ前言語的な思考プロセスが、周縁素性を持つようになったことでヒトの言語へと拡張したという考えが示されている。つまりヒトの思考—これはヒト以外の種にも共通という意味で第三要因 (Third Factor; cf. Chomsky 2005) として考えられる—が進化の過程で統語構造というヒト特有のものに発展したという

考え方である(3.2節)。また音韻部門については分散形態論(Distributed Morphology)の考え方を基本的に採用することによって、新しいメカニズムを採用することなく、その特性を説明している(3.3節)。

狭義の語彙部門および狭義の統語部門を仮定する本書の提案においては、パラメーターは存在しないという重大な帰結をもたらす(筆者は言語間の差異はPFに還元されると考えている)。第4章は、この帰結の妥当性について論じている。具体的には、パラメーターによってこれまで説明がなされてきた言語変異、言語習得、言語変化の分析に対する問題点や、パラメーター理論そのものに対する問題点を論じ(4.1節)、これらの事象がパラメーターに依らない、第三要因に還元できる方策によって説明できることを示した(4.2節)。

第5章では、これまでの語彙中心主義の言語理論が十分な価値を持っていたことを認めながらも、そこから離れることによって、生物学的な言語研究—脳と心の関係—が推し進められ、これまで困難となっていた学際的な展望が開けるであろうことを述べ、まとめとしている。語彙中心主義に基づく言語理論をやめることは、「簡単なことではないが (by no means an easy task)」(p. 147)、「今その時がきた (It's time linguist (*qua* cognitive scientists) follow suit.)」(p. 148)とする言葉は、生成文法を学ぶ言語学者が今後目指すべき、かつ目指さなければならぬ方向について、著者が最も主張したいところであろう。以上、紙幅の許す範囲で各章について概観した。

3. 本書の問題点および意義

これまで多くの研究者が、言語事象の要因を素性に求める語彙中心主義の理論に疑問を抱きながらも、この素性に基づく分析が言語事実を容易に説明できたがために、それが長く言語理論の中心となることを許してきた。本書は、生物学的観点からこういった従来の見解を否定している点で、非常に鋭い問題提起を行っているといえよう。さらに、「説明的妥当性以上」の妥当性を満たす理論とはどういうものであるかを具体的にかつ全体像を示しながら広範にわたって提示しており、一つのモデルとしてこれからの生成文法理論が進むべき

方向性を示しているという点は特筆すべき点であろう。本書は、著者の鋭い知見と、多くの先行研究から得られた豊富な知識によって、非常に読み応えのある内容となっており、理論に興味を持つ読者にとって一読の価値があることは言うまでもなく、今後の生物学的基盤に基づく言語研究の基礎的な書物となることは間違いないであろうと思われる。

あえて問題点を提起するとすれば、本書は理論構築が主たる目的であるため、全章を通じて具体的な言語事例を用いて提案の検証を行っているわけではない。従って従来と言語研究に慣れ親しんでいる者、あるいは言語現象そのものに関心を持つ読者には物足りなさを感じるであろう。さらに、本書の議論では、これまで提案されてきた様々な研究者の、様々な提案が本研究を支持するものとして紹介されている。特に第3章、第4章の議論においては、明確な最終案というものとは提示されておらず、可能性としての研究内容が示されているに過ぎない。従って、新たな提案を求める読者にとっても不完全な印象を受ける可能性は否めない。また、本書では非常に多くの先行研究が言及されており、それぞれについては十分な説明がなされていない。従って、どの論文を読む場合にももちろんそうではあるが、特に本書では、十分な理解を得るために読者自身が膨大な量の先行文献にあたる必要が生じてくる点を申し添えておく。

参考文献

- Chomsky, Noam. 2005. Three factors in language design. *Linguistic Inquiry* 36: 1–22.
- Hauser, Marc D., Noam Chomsky, and W. Tecumseh Fitch. 2002. The faculty of language: what is it, who has it, and how did it evolve? *Science* 298: 1569–1579.